大好きな人へ

八月一日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大好きな人へ

【Ｎコード】
Ｎ０６４２Ｎ

【作者名】
八月一日

【あらすじ】
私には今、好きな人がいる。好きというかかなり大好きな。
けれどその先輩はもうじき卒業しちゃう・・・告白したいけどなかなか踏ん切りがつかないまま卒業式当日・・・。

大好きな人へ

八月一日

私こと浅神香織（あさがみかおり）は今ベッドので枕に顔を埋めて脚をばたばたさせている。別に気が狂ったわけじゃない。3月1日、大好き・・・片思い中の宮城悠貴（みやしろゆうき）先輩が卒業する。しかもそのXデーまであと3日しかない。ないのに。

「どうしよぉ」

後3日。今日を入れて3日しかないのとわかってるのにいまだ告白するのをこまねいてる。だって告白して「ごめん」なんていわれたら・・・あああぁ古風にいえば自害だよ自害。

宮城先輩はバカ・・・じゃなくてでもどこか抜けててでも愛らしいといか・・・あぁもう、とにかくそういうところ含めて人気もあるしこの前隣のクラスの子が告白してたしけど先輩はそれを断った。宮城先輩はそうやってずっと女の子からの告白を断ってきた。だから私もそうなるのかなって。

そんなこんなでここ1ヶ月間私は授業も上の空。あてられても変なところ読んだり気付いたら授業したいが終わってたり。

親友の鳴海聖佳（なるみきよか）にも「初々しいねえ、まるで中学生いや小学生？」なんていわれるし。なんで小学生なの？

枕に顔を埋めて脚をばたばたさせながらずっっっっっとそんなことを考えてた。むう、確かギリシャ神話に赤い糸の神さまがいたような・・・。

どうか私の恋が成就しますように。

「で、告白すんの？」

翌日、私は教室に入るなり机にふした。あと2日しかないのに聖佳はまるで他人事。

「わかんない」

「わかんないって香織、あんた先輩のこと好きなんでしょ？」

「好きだけど・・・できないよぉ」

「そこまでいくと筋金入りね」

だってもしだめだったら？私引きこもるよ？

「今朝もさっき告白してる子いたけど、皆春とおなじでラストスパートかけてんじゃないの？うじうじしてたら取られるわよ？」

ずれためがねを直しながらら聖佳が言ってくるけど私にそんな度胸ないよ・・・。

「小学校の頃も給食でゼリーとプリンどっちを食べるか選んだときさげられてたじゃない」

だって両方食べたかったし。気付いたらほかの子が食べてたけど。

「修学旅行の時も2段ベッドの上と下で悩んでたじゃない」

「あれは下のほうは家のと同じくらいの高さだったし上でいいかなって。でも落ちたら嫌だったし」

「それで散々なやんで上って決めたのに夜中起きてきて私のベッドに潜り込んできたのはどこの誰よ」

だってさみしかったし。

「でも一緒に寝ていい？って聞いたらいいよっていったじゃん」
「あんな切ない声で言われて断れるわけないでしょ」
「でもぎゅーってしてくてた」
「向かい合ってたから向き変えようとしたら服掴んできたからでしょ。それと抱きついてきたのは香織のほうだから」

うぅ・・・いいかえせない。
ガラガラーと教室の扉が開きＨＲ開始。ああ、今日も授業上の空なんだろうなあ。
とか思ってたら本当に上の空で、授業の大半・・・４時間目が終わっていたノートは・・・白紙だあぁ・・・。

「何それ、４時間分のノート取ってないの？」
「うぅ」

昼休み、弁当をつつきながらの会話。

「それはいくらなんでも重症でしょ。早いところ告白しないと白紙が続くんじゃない？」

ああ、追試の２文字が・・・。

「あと二日しかないのに幼馴染の私としては　かなり心配なんだけど。だめだったときのショックとかで不登校、最悪ニートとかになりそうで」
「ねえ、聖香に私ってどう映ってるの？」
「子供。それも重度の優柔不断」

子供・・・しかも優柔不断。

「ひどい・・・」

「事実でしょ」

聖香は聖香でもくもくと弁当食べてるし。

「優柔不断なのはともかく先輩のこと好きなんでしょ？後２日しかないんだからさくっと告白しなさいよ」

「それはそうだけど・・・」

告白はするけど・・・するけどもしだめだったらって思うと踏ん切りがつかないし・・・。

どうして私ってこうなのかな。聖香みたいだったらよかったのに。綺麗だし頭いいしきっと子供受けもいいんだろうし。・・・なん子供受け？

昼休みが終わって５，６時間目の授業。途中ぽけーってしてたから半分白紙のノートが出来上がった。学年末考査こんなんで大丈夫かな。

家に帰っても心ここにあらずだったし。服着たままお風呂入りそうになったり洗顔とシャンプー間違えたりソファに寝転がってたらいつの間にか寝てて朝になってたり。・・・え？朝？

「あれ・・・？」

とりあえずテレビをつけてニュースを見る。日付は・・・３月１日、午前７時４７分。・・・３月１日？

「えええええええええっ！？」

3月1日?あ、今日晴れだ。じゃなくて、今日卒業式っ！

「あわわわわわっ」

えーと着替えて朝食とって。

「いってきますっ」

いってきますなんていっても出張いってるから両方いないけど・・・。

式中。各組の代表者が証書を貰ってる。その中に宮城先輩もいた。周りを見れば先輩を目で追ってる子が何人もいた。皆ねらってるんだろうなあ。

式後。先輩の周りには女の子の群れ。私はその群れが引くのを待った。そして誰もいなくなったのを見計らって先輩の前に飛び出した。

「あ、あのっ」

躓いてこけそうになった。

「きょ、今日の放課後、中庭の桜の木下に来てもらっていいですか」

「放課後中庭の桜の木下ね。ん、わかった」

「それじゃまたあとで」そういって先輩は教室へと帰って行った。

ああ、いっちゃった、いっちゃっ

たよ私。でも先輩なんで顔赤かったんだろ。

「へぇとうとう言ったの。というか言わなかったら私が無理やりに

でも先輩の目の前にまで引きずってでも連れて行ったけど」
教室に戻って聖香に事のありを話したらそんなことを言われた。聖香ってそんなことする子だったの？
「放課後ねえあっちも3時間だっけ？」
「うん」
「で、呼び出した先輩の顔は赤かった、と」
顎に手を添えてなんか考え出した。そんなに考えるようなこと？
「へえそういうこと」
そしてにやりって感じで笑った。何？何がそういうことなの？
「香織、一足先におめでとう」
「え？何が？」
わけがわからないままＨＲが始まった。けど内容は一切頭には入ってこない。右から左へ抜けていってる。早く放課後にならないかなぁ・・・あれ？放課後はいいとして、何て告白するか考えてなかった。普通に好きです付き合ってください？・・・なんか普通過ぎるような。んー・・・。
「香織」
んー・・・んー・・・。
「待ちに待った放課後っていうのに怖気付いた？」
「え？放課後？」

「そ、放課後」

時計を見ればＨＲが終わって3分経ってる。

「わあーっ！？」

「ほら、喚かないでさっさと行きなさい」

「はーいっ！！」

「はぁはぁはぁ」

教室を飛び出して中庭の桜の木下までダッシュ。途中扱けそうになったけどなんとかもちこたえてダッシュ。そして到着した今現在。

「えーと、大丈夫？」

「はい・・・」

軽く？あがった息を整えて宮城先輩を見据える。

「ふう・・・先輩」

「浅神香織」

「ふぇ？」

「で、あってる？」

「あ、はい」

何で私の名前知ってるんだろ。名前言ってないのに・・・あれ？なんでさっきいわなかったんだろ。

「えーとさ、俺からでいい？」

「はい」

宮城先輩から？何だろ。

「前から言おうと思ってたんだけど、俺さ浅神のことが好きなんだ」

「え？」

え？私のことが好きだった？宮城先輩が？

「実際あの後、浅神に告白するつもりだったんだけど何かなんかこういう形に」

宮城先輩の方から？これ何かの夢？

「浅神の方は・・・」

「あ、はいっ！・・・私も、宮城先輩のことが好きです、そのっ」

「こちらこそ」

ことらこそ？だめじゃないの？それに今私抱きしめられてる？夢なんかじゃないよね、嘘でもないよねっ！？

「でさ、こんどの土曜――」

土曜日、晴天駅前時計台にて。

先輩に告白・・・あれって逆告白？から５日たった６日の土曜。あの日先輩は「でさ、今度の土曜って空いてる？その・・・よかったらさ、どっかいかない？」それでいま待ち合わせの時計台前にいる。でも早く来過ぎたかな１０分前だし。

「早っ。待った？」

「ううん、全然」

「・・・・・・」

「どうかしたんですか？先輩」
「あ、いや、かわいいなあって」
か、かわいい・・・。
「せ、先輩もかっこいいですよ」
「・・・えーとさ、香織」
「ふぇ？」
香織・・・先輩が、名前で・・・。
「苗字で呼ぶのも変かなって思ってさ・・・俺のことも出来れば名前で・・・」
先輩の顔がどんどん赤くなってる。きっと私も紅い。
「・・・ゆ、悠貴先輩」
い、いえてる？私ちゃんといえてる？
「・・・行こうか、香織」
「はい、悠貴先輩」
―ＦＩＮ―

「はあ」
「どうしたの聖香」
「あれだけうじうじしてた香織がうまくいったのはいいけど、こうも目の前でデレデレされると」
デレデレって何？あ、メール・・・。
「えへへ」
「・・・で、愛しの先輩はなんて？」
「今日会える？って」
「気色悪いくらい機嫌いいわね。こうまでなるとは私の想像のはるか上よ」
だって、悠貴先輩の事大好きだもん。
今度こそＦＩＮ

（後書き）

はい、八月一日です。
前回は成就しなかった片想いを書きましたが、今回は少し甘い・・・
甘いですよね。
まあ、甘いお話です。
だぶんというか好き嫌いは分かれそうなキャラですよね、香織は。
みなさんはどうですか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0642n/

大好きな人へ

2010年10月8日13時55分発行